杖珠院の御本尊は地蔵菩薩。地蔵は親に先だった子供の霊を慰める御慈悲仏である。また六道を輪廻する修道を救うともいわれている。
何がきっかけかは存ぜぬが、とにかく里見の棟梁として
「修羅を召される覚悟を抱かれたということは間違いない。これまでの学僧の如きでは在らざることは、まことに祝着なり」
このことを実堯は正木通綱に話した。
「〈一統〉をめざす修羅は困ります」
「うむ。儂もそのことを考えていた」
「頭がいいことは、厄介なことじゃ」
その言葉に、実堯は吹き出した。
とにかくこの一戦で、里見勢は北条と敵対したのである。ここで確たる戦果を上げておく必要があった。
「小弓公方は扇谷上杉家と足並みを揃えて武蔵・相模を攻めると仰せじゃ。いっそ里見勢も、鎌倉を焼き払うてみたいと思う」
「鎌倉ですと？」
実堯の言葉に、正木通綱は目を丸くした。
「もはや鎌倉は足利のものでも上杉のものでもない。かつての古都を統べるは北条。ここを焼かれれば、北条の面目は丸潰れである」
「しかし、そんなにうまく物事が」
「殿に〈一統〉の妄想を抱かせぬ為でもある」
実堯はほくそ笑んだ。
鎌倉を焼けば、義豊は多くの宗門から憎まれるだろう。武門の輩として、斯様な立場を負ったことは未だない。ゆえのことと、実堯は嘯いた。
「武将とは修羅を極めること。儂も常々、倅の権七郎には教え聞かせておる」
「そういえば権七郎殿は、御歳いくつにおなりましたか」
「たしか一九だったと思う」
「そろそろ嫁の伝手を考えねば？」
「そうさな。いまは小弓公方を通じて、上州箕輪の長野信濃守によき娘がいると勧められておる」
「それは祝着。側室については、万喜城の土岐弾正少弼の娘が年頃と聞いておりますぞ」
婚儀の前から側室は早いと、実堯は思わず笑った。

品河奇襲の勢いを以て、再度の奇襲をという実堯の進言に対し、意外にも義豊は素直に応じた。〈一統〉を志す義豊なら、実堯の進言に
「好かぬ」
とでも憚る予想をしていただけに、拍子抜けさえ覚えた。
が、それはそれで、戦略上の利点でもある。
「次は、鎌倉を攻めまする」
「鎌倉？」
怪訝そうに、義豊は眉を顰めた。
「いまの鎌倉は、北条によって支配されております。往年の栄華は泡沫の如し。殿自らの手でこれを焼き払うことこそ、武門の倣いと心得ます」
「鎌倉か……」
厭だなと、義豊は口籠もった。
「鎌倉攻めには是非とも、殿御自らの御出馬を賜りたく存じます。武威を鶴岡八幡の御前にお示し下さるよう」
義豊はなんとなく渋り出した。
この切っ先を制す策が、既に実堯にはあった。
「白浜の又太郎さまは御歳一九と聞きました。このたびの鎌倉攻めには、ぜひ又太郎さまも御随伴なされませ。お慰めになると思われます」
「又太郎か」
義豊の正室は烏山時貞の娘で、既に又三郎義員という嫡子がいる。この婚礼前に雑仕女に戯れで生ませたのが、又太郎だ。義通存命中はその傍に置いておいたが、今は捨て置いている状態である。
「又太郎さまも殿の傍におれば、さぞや励まれましょう」
戯れの果てに生ませた子に、義豊は愛着を感じていない。しかし、捨て置いている現状は、やや後ろめたい。それの払拭に役立つなら、無

駄ではないだろう。
「叔父上のよろしいように」
億劫そうに義豊は応えた。
このときの尽力に対し、又太郎は終生実堯への恩義を忘れなかった。後年、犬掛合戦の折に父ではなく義堯に附いて、蔭となり里見のために尽くしたのも、このときの実堯への感謝に他ならない。
＋＋＋＋

新たなる敵（5）

夢酔　藤山